

2025 年 11 月 9 日（聖霊降臨後第 22 主日・特定 27、C 年）

メッセージ

「生きている者の神」

（ルカによる福音書20:27-38）

司祭ヨセフ太田信三

サドカイ派の人々が、復活についてイエスに問います。彼らは「モーセ五書」（旧約聖書の創世記～申命記のこと／「律法」とも言われる箇所）に定められている「レビレート婚」をたとえに用い、復活が聖書に基づかない、あり得ないものだと言います。レビレート婚とは、夫と死別したやもめに子どもがない場合、そのやもめを夫の兄弟、つまり義兄弟が義務的に結婚をし、養わなければならないというものです。この法に照らし、この世で七人もの夫をもった妻は、天の国では誰の妻になるのか、さらには聖書で禁じられている重婚を犯すことになるのではないかと、彼らは問い詰め、天の国の存在、復活の命を否定しようとしています。

これに対し、イエスは彼らの主張の誤解を指摘します。まずは 34-36 節です。「この世の子ら」には死があるため、子孫を通して自分が生き残るため、結婚をして子孫を残す必要があるが、「死者からの復活にふさわしい」者は「神の子」とされ、もはや死ぬことがないから「めとることも嫁ぐこと」も不要だと言うのです。サドカイ派の人々はこの世の婚姻関係がそのまま死後にも続くと考え、重婚の心配をしましたが、イエスによれば、「次の世」では「めとったり嫁いだりすること」はないので、重婚の心配もなくなります。

イエスは、この死後の命、そして復活の命の根拠をサドカイ派と同じ「モーセ五書」に置きます。イエスが引用したのは、神が燃える柴の中から「わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」であるとモーセに語りかける箇所（出エジプト記三章）です。当然、モーセの時代には三人ともこの世にはいないにもかかわらず、「わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」と言う神にとって、それらの命は失われたものではなく、今も神は「アブラハムの神」であり続けている＝それらの命は神と共に今も生きている、と言う訳です。

こうしてイエスは、ご自分の死と復活によって確証される、復活という究極の希望をサドカイ派とのやり取りのなかで示されました。「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神」です。「生きている」とは、この世にいる間のことだけを指すではありません。イエスを復活させた神を信じる者には、死後、神と共にある命、「神の子」として生き続ける命が用意されています。もはや死も絶望も勝てない、神と共にある命を私たちに与えるため、イエスはこの世に来てくださいました。諸聖徒日、諸魂日から始まる 11 月は死者の月とも言われます。このときにあって、神と共にある命に思いを馳せます。